

講師

中原 智美

■ 学歴

1. 2011年 山口大学医学系研究科 保健学専攻 修士課程 修了

■ 学位

1. 2011年 修士（保健学）

■ 研究分野

1. 成人看護学
2. 遺伝看護学
- 3.

■ 研究キーワード

1. 慢性期看護
2. 糖尿病教育・看護
3. 多因子遺伝, 遺伝看護
4. 初年次教育
5. がん看護

■ 研究課題

1. 慢性疾患をもつ患者・家族への看護に関する研究
2. 2型糖尿病の遺伝に関する知識が患者の自己管理行動および看護に及ぼす影響についての研究
3. 初年次教育の学修効果に関する研究

■ 担当授業科目

1. 緩和・がん看護学 (前期) 必修
2. 成人看護学演習 (前期) 必修
3. 成人慢性期看護方法論 (後期) 必修
4. 成人慢性期看護学実習 (後期～前期) 必修
5. 看護のための臨床検査 (後期) 必修
6. 初年次セミナー I (前期) 必修
7. 初年次セミナー II (後期) 必修
8. 看護総合演習 (通年) 必修
9. 看護総合実習 (通年) 必修
10. 看護学 [栄養学科] (後期) 選択

■ 授業を行う上で工夫した事項

※ 助教・助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項

1.	<p>授業科目名【緩和・がん看護学】</p> <p>主な担当内容は、がん看護（6コマ）、症状緩和のためのマネジメント（1コマ）である。疾患・治療による影響のメカニズムやなりゆきを明確にし、看護の根拠を理解しやすいように組み立て、できるだけ具体的な看護方法を示しながら講義した。また、がんサバイバーが治療と生活を両立することをサポートするための視点にも重点を置き、法制度や社会資源、チーム連携のあり方を具体的に紹介したり、実際の患者の声（大規模調査のデータ）を題材としたディスカッションを行ったりした。</p> <p>講義内容の理解を深めるための工夫として、疾患・症状・治療などのイメージが難しいものについては画像を見せたり、医療ドラマなどの話題を盛り込んだり、講義内容と関連のある最新ニュースや新聞記事を紹介するなど、理解を深めるための工夫を行った。</p> <p>講義終了後には、学び・疑問を記入してもらい、次の講義の冒頭で質問への回答や感想を紹介し、お互いの考え・疑問を共有することにより関心を高められるように努めた。</p>
2.	<p>授業科目名【成人看護学演習】</p> <p>看護過程演習では、慢性期疾患（肝硬変）の事例を通して看護過程の展開（10コマ）を主担当として講義した。反転学習として事前に課題に取り組みせ、自分が解決したい疑問点を整理したうえで講義に臨めるように工夫した。講義前後に教員8名で指導内容を共有し、講義の指示内容については、教員間で統一をはかった。</p> <p>臨地実習での情報収集を想定し、本年は事例の情報を教育用電子カルテから読み取るように変更した。実際に使用して、教員側の記載の不備や、学生が情報の存在に気づいていない場合にはアセスメントに活用できないなど、今後の検討課題が見出された。</p> <p>提出物へのコメントはあえて個別記載を行わず、全体に共通する事項をClassroomに掲載する方法とした。個別に赤ペン記載すると指摘を受けた部分だけしか見直さない傾向があったが、各自で点検しながら修正することにより改善に繋がった。グループワーク時には理解を促進するよう補足説明を行い、必要時には個別面談を行いフォローアップした。</p> <p>技術演習は、患者教育、血糖自己測定・インスリン自己注射を担当した。</p>
3.	<p>授業科目名【成人慢性期看護方法論】</p> <p>内分泌・代謝機能／腎・排泄機能／生体防御機能に障害をもつ人の看護、肝硬変患者の看護（計9コマ）を担当した。機能障害によっておこる身体面への影響、疾病のなりゆき、生活面や心理・社会的側面でのなりゆきを予測してアセスメントする力を養うためのトレーニングとして、講義で取り上げた各疾患のアセスメントの視点をふまえた観察項目を考えることを課題として課し、発表により意見を共有するなどの工夫を行った。また、既習の形態機能学、疾病学、薬理学なども想起させながら、看護を理解しやすいように講義の流れを組み立てた。</p> <p>学習内容への関心を高め、授業への集中力を高めるために、講義終了後に記入してもらった学びや質問を次の講義の冒頭で共有し、単元（2～3コマ）ごとに小テストを行いこまめに振り返りができるようにした。講義の間が空く際には課題を組み入れ、前回内容の復習、次の講義の予習につながるように工夫した。</p>
4.	<p>授業科目名【成人慢性期看護学実習】</p> <p>本年度は毎日3時間（午前）の時間制限付きで臨地実習を行った。感染症拡大の影響により、時期によって病棟に上がれないこともあったが、カルテ閲覧のみや学内での実習に切り替えるなど、状況</p>

	<p>に合わせて実習目標が達成できるように調整し、できるだけ臨地へ行けるよう、ケア実践の機会を多く確保できるように努めた。実践することでの気づき、失敗からの学びを大切にして自己や他者を深く理解できるように働きかけた。</p> <p>実習中の実践、カンファレンスや最終面談においては、次の3点を意識して直接的・間接的に指導を行った。</p> <p>①患者を全人的に捉え、これまでのライフスタイルや価値観を尊重した個別性のある看護実践 ②看護展開を通して一貫性・整合性のある思考 ③学生の強みと今後の課題</p> <p>学習面、精神面などで特に指導を要す学生に対してはこまめに個別面談を行い、実習目標が達成できるよう個々の問題に応じた指導・支援を行った。また、実習内容、実習場所、実習方法の調整を行い、実習がスムーズに運ぶように努めた。</p>
5.	<p>授業科目名【看護のための臨床検査】</p> <p>本科目では、基盤となる血液検査、画像検査の基本を押さえたうえで、系統別に検査の特徴、実施法、看護上の注意点が理解できるように構成した。主として、内分泌・代謝系／腎・泌尿器系／血液内科系／皮膚科・耳鼻科・眼科系の検査、技術演習（計6コマ）を担当した。できるだけ画像や動画を見せ、検査方法をイメージできるように工夫した。</p> <p>検査の理解だけでなく、検査の基本やデータ基準値を覚えることを促進する働きかけとして、講義の初めに知識確認テストを行った。また、終了前にはその日の内容について小テストを行い、毎回の講義に集中できるように工夫した。</p> <p>技術演習では、3つの項目（スパイロメトリー、心電図、尿検査）について検査方法、結果の判定、看護上の留意点が理解できるように構成した。</p>
6.	<p>授業科目名【初年次セミナーⅠ】</p> <p>①講義、課題などのスケジュール自己管理と学修の振り返りのために、ポートフォリオを毎回持参させシラバスで確認するよう指導した。</p> <p>②ミニレポート・レポート作成にあたり以下の点について改善を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が苦手とする「問いの発見」については、問いだてを理解しやすいようにシートの改善を行った。 ・文献検索法を繰り返し説明し実践させることで、情報の入手法の習熟度を上げる取り組みをした。 ・ミニレポートの課題文は、難易度を考慮した。また、課題文をモデルに問いだての仕方や文献の読み方を講義で説明した。
7.	<p>授業科目名【初年次セミナーⅡ】</p> <p>①初年次セミナーⅡではプレゼンテーションにウェイトを置き、従来よりもプレゼンテーション準備に充てる時間を1コマ増やし、「発表する」「討論する」力の強化に努めた。</p> <p>②初回の全体講義は他学科と合同開催とし、異なる学科のメンバーとグループワークを行うことで交流の機会とした。</p> <p>③グループ力の強化に重点を置き、ユニット（3人）を二つ組み合わせたグループ（6人）を編成し、ユニットやグループ内で討論・推敲しながら協力して創り上げるプロセスを経験できるように工夫した。メンバー間のコミュニケーションをとりやすいように、メンバー編成は他科目と連動したものとした。また、メンバーの特性に偏りが出ないように考慮した。</p>

	<p>④個々人の役割を明確にして、全員が何らかのリーダー役割、メンバー役割を経験できるような仕組みを構築した。</p> <p>⑤評価は個人評価、ユニット評価、グループ評価を組み合わせ、学生にもあらかじめ周知したうえで能動的に取り組むように働きかけた。</p> <p>⑥作業が効率よく進められるように、毎回PCを持参するように呼びかけた。</p>
8.	<p>授業科目名【看護総合演習〔慢性期・終末期〕】</p> <p>自己課題に基づいたテーマの設定、および根拠ある看護実践のために文献検索を行い、文献や理論と比較しながら科学的な視点をもってテーマに沿った看護を追求することで今後の課題が明確になるよう指導した。レポート作成時は、研究論文の形式を意識して構成できるように、個別に繰り返し添削指導を行った。また、発表会を行うことでそれぞれの学びを共有でき、最終的に冊子も作成して達成感を感じられるように図った。</p> <p>そのほか、ゼミメンバーや教員間との連絡・調整などを通して学生が主体的に行動できるよう指導・助言を行った。</p>
9.	<p>授業科目名【看護総合実習〔慢性期・終末期〕】</p> <p>従来と実施時期を変更し、7月末～8月上旬にかけて実施した。また、本年度も3時間の時間制限付きでの臨地実習であったため、実習施設と学生間の打ち合わせを行いながら、実習が円滑に進められるように調整を図った。実習では、看護実践における自己課題を明確にすることができるよう、また、看護の質向上や互いの能力向上のために、メンバー間の連携をとりながら主体的・計画的に行動できるように指導・助言を行った。</p>
10.	<p>授業科目名【看護学】</p> <p>2023年度開講なし</p>

■ 学会における活動

	加入時期	所属学会等の名称	役職名等（任期）
1.	2007年4月～現在に至る	日本看護研究学会	
2.	2007年5月～現在に至る	日本糖尿病教育・看護学会	
3.	2007年5月～現在に至る	日本遺伝看護学会	
4.	2012年7月～現在に至る	日本看護科学学会	
5.	2013年7月～現在に至る	日本看護学教育学会	

■ 研究業績等に関する事項（2023年度）

	発行又は 発表の年月	著書、学術論 文等の名称	単著・ 共著の別	発行所、発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
(著書)					
1.					
2.					
3.					
(学術論文)					

1.					
2.					
3.					
(翻訳)					
1.					
2.					
3.					
(学会発表)					
1.					
2.					
3.					

■ 外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究				
	研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
1.				
2.				
3.				

(2) 個人研究				
	研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考
1.				
2.				
3.				

■ 社会における活動

	任 期 期 間 等	団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2019年2月～現在に至る (2020～2023年度は新型コロナウイルス感染症の影響により活動休止中)	ギラヴァンツ北九州における救護ボランティア (ミクニワールドスタジアム北九州に於ける試合の際、観客を対象とした救護活動)	学生ボランティアのコーディネーターおよび指導、引率
2.			
3.			

■ 学内における活動等（役職、委員、学生支援など）

	任 期 期 間 等	会議・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等
1.	2022.4.1～2024.3.31	情報システム管理運用委員会	
2.	2023.4.1～2024.3.31	1年生アドバイザー	
3.	2023.4.1～2024.3.31	4年生アドバイザー	
4.	2023.4.1～現在に至る	看護学科種まきプロジェクト 【学力向上】分科会	共用試験導入対策（知識確認試験）担当